



国領五一郎の墓
(左京区黒谷墓地)

京都の共産党創立メンバー



国領五一郎

墓は丸太町通岡崎道バス停を北へ突きあたり右へ。黒谷光明寺の境内の東にある。
◇
国領五一郎を顕彰する会(若宮修会長)は全西陣織物労働組合気付075・441・7624。

「連載」 京都の民主運動史 史跡散歩^⑩

国領五一郎は、1902(明治35)年、西陣の職工の家に生まれ。小学4年を終えた後、織物労働者となり、英語・経済学、社会学を独学で学んだ。1921年、西陣織物労働組結成に参加、のち日本労働組合評議会幹部として活動。1923年、谷口善太郎らと共産党京都支部を結成。3・15事件後の組織再建に奔走するなど、日本共産党中央の最高指導者の一人として活躍した。

1928年10月、治安維持法で特高警察に逮捕され、激しい拷問にも屈せず、獄中の公判を闘いぬいた。法廷では「来るべき戦争が……むごたらしい犠牲を人類に強要する」ことを警告、「共産党は戦争に断固反対する」と宣言した。判決後、網走、釧路、奈良、堺と移送され、14年余の獄中生活で胃潰瘍を患い、1943年3月19日、堺刑務所で誰にも看取られずに不屈の革命家としての生涯を終えた。享年40歳。

5月例会案内	16
2月例会の報告	14
会員消息	16
編集後記	16
岩井忠熊先生のあいさつ	3
尾川 昌法	2
高木 博志	3
黒川美富子	4
山本 忠生	5
田中 隆夫	6
採録者 佐藤 和夫	11
「東辺道ふたたび」 遺稿 越中大作	10
〈紹介〉「文華」38号 成澤栄壽「歴史と文学を考える」	14
《この1枚》山宣の遺骨、「花やしき」に帰る 1929年3月9日	15

岩井忠熊先生のご長寿と新著の出版をお祝いする会から

次の仕事は「日本近代史学史」

「教え子」の一人として

21世紀に志を引き継ぐ

戦後の蜷川府政につながった京大の学生運動

京都のうたごえ運動の中でのぼくの人生(下)

「燎原」連載「革也と丹波」記載の前田英吉と棧敷新松 その2

西村清三氏遺稿の断簡 『ビルマ敗戦行記』を読む

「東辺道ふたたび」 遺稿 越中大作 10

〈紹介〉「文華」38号 成澤栄壽「歴史と文学を考える」

《この1枚》山宣の遺骨、「花やしき」に帰る 1929年3月9日

岩井忠熊先生のご長寿と新著出版を祝う

1月31日、京都平安ホテルで開かれた岩井忠熊先生（本会名誉代表）を囲む懇親会には関西を中心に身近な方々47名が参加、和やかな会となりました。

この会は岩井先生の新著『十五年戦争期の京大学生運動』の出版を祝って呼びかけられたもので、井口和起さん（本会代表）の司会で進められ、尾川昌法さんのあいさつで始まり、河上肇記念会の代表・松野周治さんの音頭で乾杯、そして、岩井先生の少し長めのあいさつがあつてしばしの歓談。碓井敏正さん、寛文生さん、北海道から駆けつけた高杉巴彦さんが、それぞれに今回の著書や大学時代、学園紛争の思い出を、「燎原」の編集長湯浅俊彦さんからも岩井先生から引き継いだ「燎原」への想いが語られました。出版社文理閣の黒川美富子さんのあいさつ、最後に教え子を代表して高木博志さんのあいさつで2時間余りの会を終えました。

岩井先生のあいさつとよびかけ人の尾川昌法さんと高木博志さんのあいさつ、出版社文理閣の黒川美富子さんのあいさつ（要旨）を掲載させていただきます。

「教え子」の一人として

開会の挨拶

尾川 昌法

私は、「特講」や「史料講読」などの講義を受けて単位をもらった、まぎれもない「教え子」の一人です。先生の早い時期の単著である『近代日本思想の成立』（創元歴史選書、1959）が出された頃の学生でした。リング箱を横に積み重ねて本棚にしていたとか、孫引きの引用は決してするな、えらい失敗をする、とか、本論とは関係のないお話を、思い出します。広小路の学舎で、門のそばに『わだつみの像』が建っていました。50年以上も前のことになりました。それ以来今日まで、私は、先生の後ろ姿を見つめながら、とほとほと、後について、歩いてきました。いまだに足もとにも近づけない出来の悪い「教え子」です。

岩井先生は、一貫して、日本の天皇制と戦争の問題を、史的唯物論の見地に立って、追求してこられたと思います。そして、歴史の逆流には怒りをこめて糾弾し、民主主義の発展を抑圧するものを厳しく批判してこられました。先生には膨大な数の論文と著作が

ありますが、「書く」ことだけではありません。大きな講演会や小さな集まりに、先生は積極的に参加し「語って」来られました。私は、これからも、そういう先生の後ろ姿を見つめて、学び続けていきたいと、思っています。岩井忠熊先生は、いつまでたっても、私の先生です。

さて、ご出席いただいた方は、岩井



開会のあいさつをする尾川昌法氏
（看板の文字は井口和子さんの揮毫）

執筆者紹介

岩井忠熊（いわい・ただくま） 本会名誉代表。立命館大学名誉教授。大津市在住。
尾川昌法（おがわ・まさのり） 部落問題研究所理事。吹田市在住。
高木博志（たかぎ・ひろし） 京都大学人文科学研究所教授。西京区在住。
黒川美富子（くろかわ・みふこ） 本会会員。図書出版文理閣代表。南区在住。
山本 忠生（やまもと・ただお） ひまわり合唱団指揮者。右京区在住。
田中 隆夫（たなか・たかお） 兵庫県治安維持法国賠要求同盟幹事。西宮市在住。
佐藤 和夫（さとう・かずお） 本会世話人、前京都市議。伏見区在住。

先生についてよくご存じの方達です。呼びかければ、何百人という大集会になることは分かっていますが、私たちは、身近な方達の、ささやかな、そして、楽しいつどいにしたい、と考えました。この新著には、私たちにとっても懐かしい名前が、例えば前田一良先生や藤谷俊雄先生など、何人も登場します。思い出なども交えて懇談し楽しいつどいになれば、と考えています。先生を励まそう、などという不遜なことは思っていない。励まされるのは、私たちに違いない、と思うからです。逆に、後輩として、先生から、力強いエネルギーを頂くという企てでもあります。

先生から、この新著執筆への思いや、計画されている次の著作などについても、お話を伺えれば、うれしいことだと、思っております。

私の長寿を祝うというのがこのつどの性格のようですから話すのですが、私の家は長寿の家系のようで、東京に住む兄忠正は95歳。特攻の回天の体験を語ってくれと言われて走り回っています。101歳の兄もいます。故人では104歳が最長でした。

日本近代史を研究するに至ったのは、書いてくれと言われて引き受けてきたことの積み重ねですね。奈良本辰也先生がそう仕向けて下さったという学恩があるのです。

一貫した関心は戦中体験。天皇制と軍国主義批判に傾倒しました。在職中は、多忙で、まあこき使われた。恨みも無いことはないのです。二冊しか書けなかった。あと十数冊は退職後のもの、楽しかったですね。

最近、新聞に顔をさらすことが多くなりました。同じような体験をした同輩、例えば武山

次の仕事は「日本近代史学史」

海兵団の同じ分隊には永原慶二、福田歓一もいたのですが死没して、生き残りが少なくなつたからです。生きていく限り仕事したいですね。最近の大学論には反発を覚えますから、この本を書いたのですが。非常勤で教えた大学で日本近代史学史をと請われたのですが、学生には基礎知識が大事だと思うし、近代史

岩井忠熊先生のあいさつ



学史の中の諸問題を究明する事は社会的責任であろうと、次の仕事にしたいのです。

いま、古典を読んで愉しんでいます。トルストイの『戦争と平和』、『水滸伝』、人類の遺産ですね。

だんだん老いていくが、皆さんの力を得ている事がありがたくうれしく、活力が増えていると思います。

(註) 須田稔さんがメモをもとに作成された文章に、岩井先生が加筆・修正をされたものです。

21世紀に志を引き継ぐ

教え子

高木 博志



岩井忠熊先生、『京都大学学生運動史』のご出版おめでとうございます。今年は戦後七〇年を迎え、戦争体験に支えられた平和憲法の意義を守り伝えるお仕事であり、考えながら読ませていただきます。

私は一九七九年春の立命館大学日本史学研究室の入学ですが、講義や演習を岩井先生から習い、大学院で指導を受けました。入学した一回生の時の「研究入門」のテキストは、哲学者・戸坂潤の『科学論』(一九三五年)であり、難しいテキストを学ぶなかで、大学の人文・社会科学の学問とは何かを問われる、洗礼を受けた思いがあります。

また「日本史概説」の授業では、明治維新から日清・日露戦争の時期までの一九世紀の後半は、国家の憲法や官僚制など制度や仕組みを作る時代であるのに対して、日露戦後の二〇世紀は地方改良運動という言葉に代表されるように、総力戦に対応できる社会を作っていく時代(村や町を変えてゆく時代)であるとの、大きな近現代史の流れを教えていただきました。今でも私自身が、授業で、そうした大きな歴史の流れを学生に伝えております。

先ほど岩井先生から、立命館に在職

中には著書を二冊しか書けなかったとお話がありました。また先輩の高杉巴彦氏からは、紛争時代に学ぶことが困難であつたとの体験が語られました。よく私や知人・家族や同窓生のあいだで、岩井先生は良い先生であつたという話がです。なぜなら岩井先生は、誰に対しても「等距離」で公平であつたからです。在職中に岩井先生は、政治的な発言を極力されず、平等・公平な調停者としての役割を立命館大学の日本史学専攻のなかで果たされ、学びの場としての、立命館日本史学研究室を再建されたのだと思います。

今回の著書の中で、『京大俳句』の同人で、投獄される精神科医の平畑静塔は、私のおばの大阪女子医学専門学校(現・大阪大学)の恩師で、あこがれの存在だったそうです。戦時下では共産主義者だけでなく平畑のような自由主義者も含めて弾圧され沈黙を強いられました。著書で指摘されます。滝川事件で京都大学が狙われたのは、滝川個人の問題ではなく、経済学部教授の河上肇が、民衆の立場に立った経済学を講じた学生たちが京都学連事件を起こし、治安維持法の弾圧対象となった、大き

な背景がありました。自由の象徴である京大をたたくことが、反動化に向かう鍵であり、転換点でもあったのです。今の朝日新聞たたきにも似たところがあると思います。

二一世紀に、岩井先生の志を、私も

戦後の蜷川府政につながった

京大の学生運動



文理閣代表者

黒川美富子

文理閣を創立して、ちょうど十年後のことですが、岩井先生の『天皇制と日本文化論』を出版させていただきました。

それは、鈴木良先生が「岩井先生の本を」とアドバイスくださったって、実現しました。

そのとき、鈴木先生は「岩井先生の本だから、文理閣でなくても…」とも尋ねられたそうです。岩井先生は「黒川君は立命館の卒業生だからね」とご承諾くださったと伝え聞いています。

ちょうど「Xデー」の時期の絶好の出版で、創立わずか十年ばかりの文理閣にとって、紙価を高めていた

引き継いでゆきたいと思います。

今回の、岩井先生の新しい近代史学史の本が刊行される、一、二年後に、再び先生とともに出版をお祝いできればと、参会の皆様とともに願っております。

エピソードもご紹介します。出版するや京都国立博物館長の上山春平氏から電話で「届けるように」とご注文がありました。お届けしました。お会いしていないのですが…。

この度は、岩井先生が「療原」にお書きになったものなど、時々送ってくださっていました。一昨年の年末に『経済』の連載を届けてくださいました。「あつ、ボツボツ時期なんだな」と直感しまして、昨年一月早々に、雄琴にお訪ねしました。

先生はそのとき、一時間半ほど、とうとうと構想をお話くださいました。たった一人で、もったいない講演を聞かせていただいた様なものです。なにしろ、先生は、あつちの本をさっと取り出して「ここにこのようにある」、こつちの本を取り出して「ここにはこのように書いてある」、野間宏の小説

の「背が高く頬のそげた…」という一節では藤谷俊雄先生を彷彿としたものです。

原稿をいただいてから、そのときのA4一枚半ほどの私のメモを見ると、そのとおりに仕上がっていました。

私が一番感じたことは、京大の学生運動は、近現代の学問の到達こそが、この抵抗を生んだということでした。それが、戦後の蜷川府政へつながっていた。京都は、今でも革新の伝統が根強く輝いていますが、伝統とは、なにも「都」の伝統だけではない、もうひとつ社会を進歩させていく革新の「伝統」があるということです。

そして、一番、感動したのは、一九三七年の最後の滝川事件の記

念集会のシーンです。あの時代に、二〇〇〇人もの人々が朝日会館に集まって、三条から四条にデモ行進がされた。逮捕者も出なかった。この件は、岩井先生の講演の言葉で聞くのが、迫力があって感動的です。

この本には、九二歳の先生の、正に熱い、青年のような情熱がこもっています。

特定秘密保護法や集団的自衛権の閣議容認決定など安倍内閣の暴走への怒りです。

岩井先生には、この青春の様な情熱のまま、益々お元気で頑張っていたいただきたいと思います。先生、ありがとうございます。

かもがわ出版を設立したのは1986年だった。岩井先生が定年で大学を退職されたのが88年。退職に際し、書きためたエッセイを本にしたいと相談をうけ、編集したのが『学問・歴史・

京都』で同年5月に発行した。味わい深い文章は、読みやすく、中味も充実してて好評だった。

そのあとも『天皇制と代替わり』(89年、後藤靖氏と共著)、『天皇制と歴史学』(90年)、『学徒出陣―「わだつみ世代」の伝言』(93年)、『大

陸侵略は避け難い道だったのか―近代日本の選択』(97年)と次々タイムリーな著書を執筆していただいた。

岩井先生とは私の「京都民報」時代からのお付き合いだが、かもがわ

地元出版社を大事にされた 岩井先生とかもがわ出版

出版のことをいつも気にかけて応援していただいた。「戦前の弘文堂、戦後の三三書房のように東京に本社を移すことなく京都で頑張ってほしい」。

かもがわ出版のパーティーであいさつされたことも忘れられない。

湯浅俊彦(元かもがわ出版編集長・本会世話人)

「歌劇沖繩」

うたごえ運動に変化が始めるのも60年代の半ばですね。関鑑子さんが歌劇を作りなさいと提唱し、僕は加わらなかったけどなかまたちがそのための調査に沖縄に出かける。パスポートを取り、アコーディオンも持ち込めないで解体して持ち込んだとも聞いています。この調査が70年の「歌劇沖繩」の上演につながっていく。専門的な力量がアップし専門家も出始めてくるんですね。作曲家の外山雄三さんも全面的にバックアップし、京都でも

京響山田一雄さんが指揮をする、多数の専門家の力を借りて全国上演を成功するんですが、そうなるってなるとこれまでギターやアコーディオンの伴奏で歌ってきた合唱団にピアノが加わってくることになるんですね。

「歌劇沖繩」の上演は合唱団にも変化をもたらします。当時、専門的な知識が必要とされ、それに対しての敬意も払うことになる一方で、専門家をプロと見做す逆差別といった感覚も合唱団に生まれ、実際そんな言動は散見されました。変化でいえば、年代ははっきりしないけど、井上頼豊さんも一度やってみたらということ、コン

クール形式の発表会になって、その後、指揮者やピアニスト、講師者も含めて専門家が加わるようになり、コンクルールの要素が次第に強くなり、発表会で日頃の交流が出来なくなる。15年ほど前からですかね、コンクールの中に交流の部が設けられるようになり、自分たちの合唱団の個性を発揮できる場が復活をしてくることになってきています。

京都で日本のうたごえ祭典開催

「歌劇沖繩」の上演がおこなわれて

なる日本のうたごえ祭典を京都で開催しました。規模も大きかったし準備に忙殺され、何が何だかわからないままうたごえ祭典は終わったように思いますが、この祭典では10年ほど元気をなくしていた、働くものの合唱団に元気をと職場を基礎に祭典を考え、成功させることができたのは良かったなと強く記憶に残っています。

赤字克服運動とうたごえ協議会

その後、80年に京都生協との文化協定を結び、桂店の2階に京都音楽セ

しかつたけど克服運動を地道におこない、およそ5年半かかり赤字を完済することができました。この赤字克服の運動がうたごえ協議会を鍛え、府内全域の運動となって、新しい専従者を迎え入れることにもつながりました。府内13地域での合唱発表会運動も生み出されました。

2009年には第3回目のうたごえ祭典を開催、黒字での成功。現在も府内13地域2分野（職場・女性）の合唱発表会がおこなわれ、14年は264団体が参加しました。うたごえ協議会への加盟は65

京都のうたごえ運動の中でのぼくの人生

〈下〉

団体、個人14名、うたごえ新聞も940名の読者がいます。

僕自身の活動

も今も各地のうたごえとの交流と親交を続け、

いた70年に、中京区冷泉町に土地を買ってプレハブで京都音楽センターが建設されたんですね。それまでの合唱団事務所は、川端丸太町にあった教育会館の隣、会館とは別棟の建物で、人形劇団京芸もそこに事務所を構えていました。68年に焼失、火事の時にその事務所泊まっていたんですが寝ようと思ったら火事でたたき起こされ、ピアノだけ運び出すのが精いっぱいでした。

その流れで、75年に初の地方開催と

——歌とアコーディオンと旅と——

山本忠生（ひまわり合唱団指揮者）

ンターをつくり、翌年に株式会社化をはかって、出版やレコードの制作等も始めました。87年に現在の会館に移り、他の文化団体と協力して西陣にも文化センターを建設し、合唱団活動の拠点も持つことができました。

そして89年に2回目の日本うたごえ祭典を京都で開催することになったのですが、京響とKPJO（京都ポッブスジャズオーケストラ）の2つの楽団を中心に大音楽会をやったものだから大赤字を抱えてしまいました。厳

（以上12月例会の報告・文責井手）

前田英吉と棧敷新松

(その2)

田中隆夫 兵庫県立大学文学部法政学系准教授

芦田丈司氏（元須知高校教諭）の
論考「前田英吉―自由民権から社会
主義へ」（1994年9月発行）は、
前田英吉（以下英吉と記す）の生涯
（1859年～1909年）を詳細に

調べ、京都時代からの留岡幸助、岩崎
草也らとの交流を織り込みながら、激
動の時代を背景に書き綴っている。一
つ一つ事実を調べ積み重ねながらの力
のこもった、すぐれた労作である。

「週刊平民新聞」に登場する英吉を
知り、社会主義者となっていく彼に大
きな魅力を感じたことがよくわかる。

1980年代に、北海道で旅をして
いた英吉の孫と歴史学者永井秀夫との
偶然の出会いがあった。そこに京都の
原田久美子（自由民権運動研究者）も
かわり、英吉の三男・前田則三が出
版した英吉手書き自叙伝を、芦田が入
手したのである。これも芦田が英吉の
生涯を書いていく力となったであろ
う。

永井は、自叙伝をもとに「歴史評論」
1984年11月号に、「北海道の自由

民権運動」を書き、渡道民権家の項を
設け、自由民権家英吉がなぜ渡道して
きたのかを述べている。

芦田の連載は94年6月で終わり、探

前田英吉―自由民権（丹波）から社会主義（札幌）へ

(1) 京都―1880年・民権結社以学会から

日本立憲政党へ

英吉は、丹波国氷上郡下竹田村字高
木戸（現在の兵庫県丹波市市島町）の
地方代官を務めた依田新蔵・宮本ミキ
の次男として1859年11月に生ま
れ、8年後に父が死亡する前に、父の
兄の前田九一郎が父の出身地、丹波国
船井郡須知村に連れ帰る。

前田家は酒造業を営み「鬼殺」を銘
柄とする。その九一郎の養嗣子となる。
学制が公布されると2百人を超える生

求も終わっていた。北海道で英吉を調
べ、歴史の中での位置も明らかにした
社会運動研究者堅田精司が、北海道初
期社会主義者たちのことを詳しく書い
た「新札幌市史」第3巻通史3の第6
章第3節「社会主義運動」などの項目
を、織り込むことはできなかった。（出
版は、1994年3月）

芦田も「あとがき」で「できれば札幌
幌に出掛けて行って、直接調べたいと
思いながら果たすことができなかった
」と書いており、私の連絡で思い起
こしたのも、その思いが強くあつての
ことであろう。

堅田は、「北海道社会文庫通信」を
2000号まで発行し、北海道の民衆
史のあらゆる分野を探究し発信してい
る。

堅田は近年亡くなったが、芦田と堅
田が80～90年代にでも会えていれば、
どんなに詳しい研究が進んだかと、お
二人の文書を読んで痛感する。堅田は、
英吉に関して「通信」では4回書き残
している。2000年の3月には、英
吉の生涯を簡潔にまとめている。この
二人の成果の紹介とその後の探索も加
え、今回は英吉の北海道移住までを明
らかにしたい。

徒を収容する須知小学校に、別宅の家
屋敷を提供。英吉は、のちに府會議員
となる父を持つ桜井冬と結婚。

1875年、丹後の宮津に天橋義塾
が生まれ小室信介、沢辺正修らの指導
で民権運動が広がり、但馬・丹波に影
響を与えた。福知山に民権拡張めざす

百余名の結社・共成会が生まれ、船井
郡では、園部が拠点となるとともに、
交通の要路となっていた須知でも、国

会開設運動の最中の1880年、20歳
の英吉は自由懇談会を開き、結社・以
学会を組織。

須知駅では、1881年夏、英吉ら
20名の有志で新聞閲覧所が作られ、数
十種の新聞雑誌、新刊の翻訳書を取寄
せ、須知住民だけでなく、通行の旅客
にも閲覧の便を与え、定例日を設け集
会をし、「新聞の談話」を行った。

大阪に小室、沢辺も加わる立憲政党
が結成されると加盟し、船井郡だけで
も155名となった。

須知33名には、岩崎革也の父岩崎藤
三郎も加わる。藤三郎は、1894年
資本金3万円で須知銀行を設立、専務
取締役となっている。翌年藤三郎が死

亡し、岩崎草也が頭取となる。なお、草也は前田英吉のちょうど10歳下で、近所仲間でもある。

1878年・1880年の2倍、7倍という酒税引き上げに対して全国の酒屋が大反対運動を行い、1882年植木枝盛呼びかけの大阪での全国酒屋会議に英吉は代表を送った。

1882年5月立憲政党支部より幹部が須知を巡回した時には、84名が集まり十数名が席上演説を行うなど、「立憲政党支部新聞」に「黨員の進歩の速やかなる実に驚くべき」と書かれている。弾圧の一環として6月に改正集会条例で、社員名簿を義務付けされたが、本籍を基準に見ると、大阪29名、兵庫・但馬30名、兵庫・丹波16名、京都・丹波209名、丹後149名、山城7名、京都4名と京丹波が際立っている。

立憲政党支部は、1880年国会期成同盟第2回大会をうけて、81年9月に結成された近畿自由党を発展させて確立された。その運動の特徴は新聞発行や



前田英吉

演説活動による思想高揚を重視した。近畿自由党の事実上の機関紙の役割を、古沢滋主筆、小室信介監事の「大阪日報」が担っていた。82年2月立憲政党支部が買収し、日本初の政党機関紙「日本立憲政党支部新聞」が生まれ、古沢が、理論的にもリードした。国約憲法(注：1)を求め、君民共治論に基づく英国を模範にした立憲君主制、一院制議會、普通選挙など英をこえる民主的制度を展望した。運動論では統一戦線を志向。これらの主張は、「日本立憲政党支部新聞」の社説などでも一貫したもので、党としての組織的合意点であったと考えられる。英吉たちもこれを掲げて奮闘したと言える。

1882年の改正集会条例など相次ぐ弾圧―発刊停止など―と、政党維持の資金難が原因で、1883年3月の定期総会で解党を決議した。しかし「立憲政党支部新聞」は、その後も維持にあたった沢辺などの努力で1885年7月まで発行される。9月1日より元の「大阪日報」と新聞名を変えた。財力は、



旧須知小学校

党の会計監査役にもなった大和国吉野の大山林地主、土倉正三郎に依拠するところが多かった。最終的に、三井組銀行部の兼松房治郎などの斡旋もあり、1888年11月に実業新聞へ移行、「大阪毎日新聞」となり、1897年に社長に就任した本山彦一により部数も伸びていくが、号数は「日本立憲政党支部新聞」を引き継いだ。

立憲政党支部解体後も、国約憲法の要求は、その後の関西民権運動の伏流となっていく。

実際、帝国憲法発布直後に、淡路島の自由黨員、のちに兵庫県議も務める島田邦二郎は、「立憲政党支部改革之急務」なる憲法案をだし、明治憲法を根本から批判し、民主的改革案を提案していた。「政府は人民がありて、後にできるものである。人民は本で政府は未なり」と国民民主権論を基調に英国流責任内閣制を範とした。一院制、普通選挙、地方自治、男女平等などを提言している。淡路の運動の源流には、天橋義塾とも関わり、島田邦二郎は慶応義塾で福沢諭吉から学び、激化事件のころの千葉と大阪での塾講師をへて自由黨員の兄の元へ帰り淡路の自由民権運動に加わっていた。(注：2)

兵庫・丹波では、1882年10月には立憲政党支部部を招き氷上大懇親会を開催しているが、活動の中心にいた中島右衛門は「自由党史」を自ら作成、流布させるなど丹波・佐治村を軸に活動をするため、のちの運動へ引き継がれ

ていった。

なお島田邦二郎の憲法案と運動に關しまとめたものが今年大阪民衆史研究会より出版される。

英吉も、解党後1884年7月27日須知で憂国懇親会を開催、有志百五、六十名の参加で「盛会にて来会者はことごとく自由主義を執らるる由、且つ又爾來は時々懇親会をひらき進んでは丹波自由党をも團結するの計画なりと聞く」(「京都絵入新聞」報道)と報道されている。

同志社の新島襄に關わり興味深いことを、高久嶺之介氏が『新島襄と自由民権家の群像』で指摘している。

新島の大学設立運動の直接の契機は、新島と先の吉野の土倉庄三郎との出会いであった。立憲政党支部の創設、組織拡大へ進もうとする時期、1881年10月、土倉は古沢滋を伴い新島宅を訪問、2名の子どもの教育を新島に託した。この時、古沢が大学の必要性を語り、新島もまた同志社に於いてその計画があることを語り、土倉はこれに賛成し、応分の協力を約束する。古沢は、民選議院設立建白書を起草した人物で、元老院権大書記官を辞して「大阪日報」に入社した1年後であった。「私立大学」設立の土倉、古沢の賛意は新島の意を強くし、翌年1882年1月、新島は大阪の土倉邸を訪ねたが留守の為大風雪の中、吉野まで訪問、資金力を頼み、5千円の寄付をえた。ここで逗留中であつた立憲政党支部総理中

島信行とも面談した。4月新島は、古沢にも同志社大学創立の期待をかけ、設立の趣意書づくりを依頼している。小室信介にも会った後、明石＝姫路＝

(2) 京都―1887年・キリスト教入信、

酒造業を廃し須知教会堂主任執事に

1883年9月19日養父九一郎が死去し、英吉は田畑を売り負債を整理した。京阪地方を旅行、京都で四条教会を訪れ、新島襄の説教を聞き、心を動かされる。

丹波へのキリスト教伝道の最初は1887年であり、1884年6月に丹波基督教会が設立された。この時30名の会員であったが以降本格的に丹波への伝道が開始される。英吉が丹波基督教会の歴史に登場する最初は、1884年6月2日に、英吉が説教会を開いた記述である。6月4日、7月4日には伝道をする。とある。



留岡幸助

生野＝豊岡＝久美浜＝宮津＝福知山＝園部＝亀岡＝京都と旅行し、天橋義塾では3時間の聴講を行っている。

磯雄が、伝道にはいったのが最初である。

1886年には須知へ集中した伝道が行われ、10月2日に100名を超える参会者となる説教会が開かれた。この時、生涯の友となる同志社の学生、

(3) 京都―1888年・府会議員

1888年11月補欠選挙での当選から1889年3月辞任まで府会議員となった。

舞鶴街道の道路予算確保、土地・肥料の分析など農業の科学化のために巡回教師の派遣の提案―これらは議會を通り実現していく。娼妓廃止の建議―遊郭からの税金を引き上げることに対し、娼妓を基本にして、園部に新設置する予定の遊郭を取りやめよ、正業に転ずるべく説得を、と主張した。これは、賛成者一人もなく否決される。当時群馬県では運動の結果、1882年には「娼妓廃絶ノ建議」を採択し、1889年に県会で再度公娼制度廃止を決議し、93年限りで公娼制度を廃止

5歳下の留岡幸助が参加している。

1886年春ごろには、代々営む酒造業を廃業することを決心していた。

翌1887年、3月26日丹波第1教会に於いて金森通倫牧師により受洗する。その年11月旧酒造庫を改装し須知教会堂を作り、英吉は主任執事となる。

「酒は百害の本」と演説会でも訴えている。伝統ある生業の酒造を廃し、酒自身を否定するという思想的な変化である。この頃英吉は丹波基督教会の牧師を留岡幸助に依頼し、留岡は就任する。1889年が須知での信徒数26名で、ここからは天皇制国家の確立とともに減少していく。

する。

1889年2月11日、大日本帝国憲法発布、衆議院議員選挙法が公布された。第1回衆議院選挙は1890年7月実施となった。京都府は選挙区6区、丹波区のみ定員2名であった。

1889年5月12日英吉は、丹波5郡懇談会を開き、「本会の目的は国会候補者を選ぶことと、第2に親睦を円滑にすること、候補者は政治上の主義を發表することを望む」趣旨を語った。会の内容を書き留めていたのは、留岡幸助（注・3）であった。

7月1日の投票結果は、吏党が2名当選し、民党は落選。しかし、得票率は38・2%吏党、民党側は36・4%で

大差なかった。

府議辞職後、須知町議に半年間たったあと9月にはすべての公職を退く。

留岡によると「君は情の人よりも智の人、智の人よりも意の人であった、元来が硬骨漢だけに、時流に陥らず、富貴権勢に屈せず、常に正々堂々の議論を上下した人で、いわゆる正を踏んで懼れざるの士であった。君が府会議員たりし頃、辞表を提出、郡長はつき返し『ぜひ思いとどまれ。本年の通常府会に臨まれば、常置委員（注・4）の肩書は必ず君のものである。なれば、その肩書きを利用して、他の事業をなすことができるではないか』と言ったが断然これを辞して『余は常に世間肩書きを利用して、世を瞞着するもの、多きを憂うるもの、なんで自ら好んでその中に入るのか。』と退去した。」との趣旨を書いている。

芦田丈司氏によると、真の理由は、前田家の財政困難と、須知村に所有する土地を売り、負債を返した残金で立憲政時代からの盟友明田吉五郎の為に、曾根村の明田の土地を購入したが、米価が下がりその上の金利上昇で、土地だけでは生活できず、他の生活の道をもとめていた。このため名誉職の府議を辞職した。まして肩書きを利用した利益など求める英吉ではなかった。

須知を去り、京都市へ移る際には、教会執事を明田吉五郎に引き継いでいる。

(4) 京都―1889年・雑誌「農工商」発行

英吉は、1889年11月15日付で月刊誌「農工商」を創刊している。9月に京都市上京区両替町通丸太町下ル西方寺町4番に転居。その地に、殖産社を設けて発行所とした。

芦田は、発刊の理由を、こうまとめている。

「通商航海条約や裁判管轄条約案に対して国民はその不平等条約であることに憤りを抱いていた。反対運動が全国的に起こっていく。列国から不平等な条約を押し付けられることに對する残念な思いは、前田だけでなく、国民一般が抱いていた。そのためには国力をつけ、列国からは侮られないようにする必要があった。列国から産業も文化も直輸入するに汲々としている現状に対して、前田は国の基本である農工商を経済的に高めていくことの緊急性を強調している。前田や人見(編集人)の主張は当時の日本の弱点をよく見、現実的にどのようにしていくべきかの方向性を明らかにしていた。」

また地方主義を掲げ、それは、反都会主義であり、反中央主義であり、それを農工商の日本産業の基幹部分で実践しようというのである。その思想を広げるための「農工商」の発刊であった。

「北海道移住者心得」が掲載され、北海道庁殖民課編集の「移住案内」も

掲載、続く号には、北海道移住者の紹介記事が出ている。案内の掲載号の2か月後1892年7月には英吉自身が北海道への旅に出ている。

販売は、実際には、京都・滋賀の域をでず、雑誌発行では生活を助けることができないことを知った英吉は、人見に後をゆだね、支援を引き続き行いながらも、数号で手を引いた。

ここで、もう一人英吉の生涯に関わ

(5) 大阪―1890年・大阪市淡路町2丁目

時計商

英吉は大阪で2年過ごすが、商売振るわず疲労で病をおこさんとする状態となる。1891年5月には長女が7歳で急死する。疲労困憊した英吉は、7月になり転地療養を兼ねて北海道へ旅行をする。1か月札幌に滞在、将来望みある新天地であり、自らの健康にも適する風土であることを認識する。

ここで、北海道に渡ったばかりの留岡(注：5)と再会する。市来知(現在：三笠市)に尋ね、空知集治監に収容された囚人の働く炭坑も見学。

帰阪した英吉は、北海道移住を決意した。この時、家族は、夫婦と長男英一12歳、次女とし子8歳、次男忍5歳。北海道にわたって後1893年10月に

る人物が登場している。創刊号広告欄に桑の木いかるがの改良の広告がある。最後に「丹波国 何鹿郡綾部町字田野丹波第1基督教会員 愛植園 田中敬造」とある。田中敬造は、綾部の生まれで1886年養蚕の仕事で愛媛県大洲に赴いたとき大洲教会の説教会に参加、帰りに神戸で教えを受け、知識と熱意を持ち綾部の田野に帰り、綾部にキリスト教をもたらした最初の人物となる。田中敬造は、英吉に続いて同じ年、留岡の勧めで札幌に行くことになる。

3男則三が生まれている。

英吉は自叙伝で、札幌へ移住の遠因と近因を7つあげている。①基督教信徒になったこと②酒造を廃したこと③米価の下落したこと④京都の雑誌業⑤大阪に親戚ありしこと⑥留岡・神田両氏の移北⑦明田・森本両氏が予に代わりて土地の世話をせられたる事、である。直接には留岡の影響が大きかったことは明らかである。神田は、園部出身で、英吉の移住を援助し、のちに留岡の家庭学校の職員として英吉の3男則三と留岡を助けることになる丹波時代からの仲間である。

芦田氏の調査では、この時期に丹波基督教会より、神田をはじめ先に記し



社会主義者茶話会が開かれた前田商店(『新札幌市史』より)

た田中敬造など10名ほどが移北している。札幌市北一条東2丁目に家を構え、のちに洋品雜貨店を南二条西3丁目に開店することになる。

こうして、新天地での生活と新たな活動が始まった。(続く)

(注：1) 国約憲法―国民代表の會議によって憲法を作成して天皇に承認させる手続を経る事で国民と君主間の約束事として位置づけられた憲法。

(注：2) 淡路は1876年8月まで四国の範疇であった。1863年足利三代木像梟首事件の一人丹後岩滝の小室信夫(信介の養父)は、徳島藩預かりとなったあと、徳島藩士となる。1872年藩主峰須賀茂韶もちあきの渡英に際し、大参事となった小

もう一度いつかは行ってみたいと思っていました。8年前に行けなかった処へ今回は何箇所か訪れることができました。綴芬河・東寧・図門・龍井・集安の丸都山城・桓仁の五女山山城です。

1997年・夏 旅順。

日清・日露のフィールドワークに参加しました。この時初めて「楊靖宇」の等身大の写真を「日俄監獄記念館」で見ました。この監獄は初めロシアが建てた後、あとの半分を日本が建てた監獄です。監獄には陳列館、朝鮮独立運動の志士・安重根が収監され、絞首刑になり、絞首台もそのまま残されていました。

この陳列館には中国・朝鮮の二人の志士についての展示と説明もありました。「楊靖宇と東北抗日連軍については、ハルピンの東北烈士記念館と、通化の楊靖宇烈士陵園に行けばさらに詳しく知ることができます」。

2001年、9・18、70周年の集会在「瀋陽郊外の柳条湖」で開催され、日本からも日中友好協会の県連単位で多数参加しました。「大分」のグループが「東辺道」に行くとのことと、私もこれに参加しました。

このツアーは、福岡、大連・千山・鞍山製鉄所・瀋陽・撫順・通化・白河・白頭山・延吉というコースでした。現地ガイドも歴史に詳しく「抗日問題」についてもかなりよく知っていました。

今回まず驚いたのは、「集安」の遺跡群の整備です。前回は、遺跡から遺跡へは細いあぜ道のようなところをたどって移動しました。丸都山城は工事整備中とかで見学不能（中国ではよくあります）、私はハルピンの「東北烈士記念館」を4回訪問しまし

たが、いろいろな理由（改装・工事中）で見学できませんでした。

もう一つ驚いたのは、楊靖宇烈士陵園の整備です。陵園地下の記念館にはびっくりしました。

東寧は、関東軍の「ソ満国境に14箇所」の要塞を構築した一つですが、要塞を構築するのに多くの中国人が強制労働を強いられたことを忘れてはならないと思いました。

大作 越中 遺稿

この「東辺道」は、19世紀初めに朝鮮族が国境を越えて住み着いた。清朝もこれを黙認してどんどん増えていった。今回のツアーでは時間の制約もあり十分ではありませんでした。延辺から白川、白川から通化の通り過ぎた多くの村々や町に戦前「抗日」の闘いが繰り広げられたところが沢山あります（3・13運動、青山里の闘い、5次にわたる共産党弾圧事件……）いつかの機会にまた村々を訪ねたいものです。

最後に「名ばかり団長」でしたが、本当に楽しいツアーでした。富士ツアーリストの近藤さん・荒川さん有り難うございました。来年はどこに行きましようか？（2009年10月15日記）

◇

越中大作さん（東山区在住）は昨年末、病気で亡くなりました。これは「09平和ツアーレポート」（日中友好協会京都府連発行）に書かれたものです。旅の中で、朝鮮共産党とかかわりを説かれましたが、それをまとめどこかに発表してほしいと申しましたが実現せず残念でした。

（本会世話人・小田切明徳）

室信夫と旧高知藩古沢滋が同行した。茂留は、鉄道事業と立憲政体制度に関心を持ち二人に国会と選挙制度を研究させた。二人は帰国後、板垣退助らと「民選議院設立の建白」を1874年政府に提出。小室信夫のあと大参事を務めた井上高格は、自由民権運動に加わり、小室の勧めで賀川純一（賀川豊彦実父）らと1874年「自助社」を結成。翌年出された「立憲政体」漸進利用、注釈として君民共治の思想を問う「通論書」を印刷、広範に配布した。政府は禁止、検挙を命じ入獄させた。

（注・3）留岡幸助は、岡山県高梁（たかば）に生まれた。留岡は、回想し、こう書いている。「私が十二三歳から十四五歳の時は、西南戦争終結して、政治上からいえば自由民権の思想が強く叫ばれた時だった。その結果として国会の開設が政府に迫られ、板垣伯の如きは土佐にて立志社を建て、盛んに自由民権を鼓吹して居られたのである。丁度此頃の青年学徒やその他の人々によって、マルクスやエンゲルスの社会主義が歓迎せられるように、ミルやスペンサーやモンテスキューやルソーの学説が盛んに唱えられた。また演説やその他の集会在頻りに催され、官権と民権との衝突で演説会も中止されたり、解散を命ぜられたり拘引されたり、入監するものさえもあり物情騒然たるものがあつた。」

高梁でも二宮邦次郎らが設立する「開口社」が生まれ、自由民権の政治論を唱えたが、この「開口社」が導火線となって基督教がはいつてくることになった、と留岡は回想する。この二宮邦次郎が、1879年に、英吉と同じ金森通倫に導かれキリスト教を信仰することになり、15歳の留岡も影響を受けていた。

（注・4）1880年11月に、府県会規則は改正され、常置委員をおくこととされ、府

県会が開かれていない時期にも活動する数人の常置委員が、府知事・県令から地方税支弁事項について諮問を受け、意見を述べるもの。

（注・5）留岡幸助…1891年5月丹波基督教教会牧師から北海道空知集治監、教誨師へ。丹波では引き留められたが留岡は「私は北海道の開拓に行くのではない。心の開拓に行くのである。」と語り別れを悲しみながら同志としての丹波の仲間への心に訴え、新たな決意を明らかにした。

●1881年監獄則改正で懲役、禁固刑での拘禁とは異なる「徒刑流刑及び監獄の刑に処せられたる者を集治する所」として集治監を北海道へ設置し、山県有朋のいう囚徒の使役労働が行われた。大井上輝前は釧路集治監典獄（所長）をへて1891年北海道集治監の初代典獄となる。原胤昭（たけし）などクリスチャン教誨師を多数採用し、受刑者の人権保護や感化につとめていた。

東京番町教会牧師となっていた金森通倫から「大井上氏より同志社出身で監獄の教誨師ができる人を選抜してほしい」と頼まれたので、留岡に行くように連絡があつた。留岡も英吉と同じく金森から受洗していた。

◇

立憲政党に関して、竹田芳則「立憲政党的憲法論と関西の自由民権運動」（歴史科学193号）、「立憲政党的展開と近畿の自由民権運動」（ヒストリア107号）、および原田久美子、京都民報連載「物語京都の自由民権運動」「関西における民権政党的軌跡」（歴史評論1984年11月号）、毎日新聞百年史（1972年刊）、徳島市史第2巻「1986年刊」を参照した。

西村清三氏遺稿の断簡

荒木進著『ビルマ敗戦行記』を読む

採録者 佐藤 和夫

今年、1931年の満州事変から15年続いたアジア・太平洋戦争が敗戦という形で終結して70周年となる。1980年に創設された「京都の民主運動史を語る会」の初期の会員であった故西村清三氏（1910生―1990没）の1982年当時の遺稿が、奇しくも作家西口克己氏の遺品の中から昨年末に発見された。遺稿は荒木進氏の『ビルマ敗戦行記 一兵士の回想』（岩波新書・1982年7月刊）について、西村氏自らも体験したビルマの敗戦行の「読者の感想文」的な原稿である。

同書は、「ビルマにおける日本軍最前線の一兵士が、自ら書いた生活実態」とするもので、かつ「壮烈な戦闘場面はない」ものの、日英の戦局は日本軍が「全戦線にわたり南ビルマに向けて撤収しはじめていた」敗走記である。著者の荒木進氏の略歴は、1914年東京生まれ、1940年東京帝国大学法学部卒、日立製作所勤務当時の1944（S19）年6月のはじめに三度目の応召でビルマ派遣軍「烈師団」の補充要員としてインパール作戦（日本軍の「ウ」号作戦こと）に従軍している。帝大卒の一兵卒、軍隊は性に合わないと思っている召集兵のところに西村氏は注目したものと推測する。

前線部隊の軍医の立場からの『靖国街道』（中野信夫著・1977刊）や従軍記者の眼の『インパール作戦従軍記』（丸山静雄著、1984年刊）などには西村氏は特別に反応せず、荒木氏の「二銭五厘の赤紙」で召集された兵隊目線のところに共感したのであろう。

まさに、同時期、同戦地でほぼ同身分の一兵卒の身であった西村氏が共感し補足したい気持ちに駆られ、著者の荒木氏に感想文として送る予定の原稿だった。しかし、時期を逸したか、または作家・西口克己氏が準備中の赤旗「日曜版」連載小説「戦争狂騒曲」番外編のエピソードとして材料提供するものだったかは、不明である。しかし、軍の論理と軍官僚の身勝手さを、記録にとどめようとしていた西村氏の思いを汲んで、採録することとする。（紙幅の関係で一部割愛しました）

なお、荒木氏の著書をテキストとして前提にしているのが西村氏の補足に必要な範囲でコメント（※）をつけることにする。また、西村氏はテキストのページ順に感想をつけていないが、西村氏の記述どおりに採録する。なお、西村氏は昭和の元号を使用しているが、基本的に西暦と並記する。

（文責・佐藤和夫）

―1943（S18）年12月から1945（S20）年8月の敗戦まで、私（*西村本人、当時33歳―採録者補注、以下同じ）は南ビルマ（*現ミャンマー）の兵站業務と貨物廠の倉庫管理を受け持つ森第8224部隊（本名陸上勤務第94中隊、*ビルマ方面軍暗号名・森、陸上勤務というのには陸軍輜重兵特務兵（以前は輜重輸卒で兵隊の大夫の上等兵でした。負けて捕虜になってからも南部のムドンを中心に土方作業をしたものです。この著作のはじめにでてくるアナキンで敗戦を知りました。

アナクインはタイ国境に近く、私の属した第3小隊のいた村の山ひとつ向こう側にいた第2小隊の報告には、昨夜虎が出た。炊事場の牛（一頭をたてに二分した半頭分）をもつてゆかれた。朝、小川へ洗顔に下りた向こう岸に錦蛇がとぐろをまいていた、などなど。私の小隊と中隊本部の設営しているところは、去年コレラで一部落全滅した。その跡の空屋住まいなのでした。この行記を読んで、著者（*荒木進氏のこと）の記憶を補助する意味で記します。何かのご参考になれば、幸甚。

―1944（S19）年正月下旬、私の中隊はラングーンから南下、サルヴィン河東岸のビルマ第三の都市モールメンへ移駐（1944年3月のインパール作戦発起点への移動）。このとき、びわ湖のはり丸ほどの渡し船で渡河。約15分たっぴりかかりました。あとでわか

りましたが、よく無事に渡ったと。いわゆる「ウ」号作戦（*インパール作戦は1944年3月発動し、7月中旬作戦中止となる）が始められたところで、ここは戦線の最南部になります。英軍機が磁気機雷を5ヶ、10ヶほどサルヴィン河へ投下しました。（*すでに制空権は英印軍にある）私たちが移駐してからは殆ど毎夜でした。

マルタバンはモールメンを経て前進する部隊の渡河点。英印軍の主要目標地点です。私の中隊へも毎夜その爆発する音がドカン、またドカンときこえました。金属には何によらず吸い付いて爆発する機雷、あの定期船は次々に沈没、人命も同様、貨物も。木製でないとやられますから、サイパンが多くなりました。モールメン、マルタバンの連絡はサイパンのみ。兵隊たちだけでなく、川岸に展開している商業地区の人々も不自由しながらサイパン。サイパンは人5名はゆっくり乗れる舟で二丁櫓を交差して1人で漕ぎます。この本には30分ほどとありますが、水勢によりますが、私が時計ではかったことがありますが、45分余りでした。サルヴィンは敗走してきた日本兵を多数呑んだ河のひとつですが、河口はびわ湖の一つ位ゆっくり呑み込めます。

―〈三 モールメン集結〉死に神91頁の死に神云々の箇所はこのマルタバンが抜けています。そのはずでしょう、死からの脱出するに全力を集

中したので忘れてしまったのでしょう。マルタバンで兵站の白米のめしと味噌汁くらいはたべているのです。そして夜にサイパンで渡河。モールメンの河岸についてたのです。この白米のめしですが、(私はこの年の3月～5月にマルタバン兵站の兵隊でした)ふんどしひとつ、裸足、シャツを着ていればよい方で、泥と汗まみれ、頭髮はのび、ひげだらけの敗残兵の群れが、三々五々、ばらばら、ふらふら、下りてくる。マルタバンは敗残兵で充滿。

昼間は「街道荒らし」とニックネームした英印軍小型戦闘機が不意に何度か現れます。機関砲をうちまくってすぎ去ると、またくる。そういう状況で食糧不足。兵站の責任ですが、周囲農民はもうそっぽ向いて売ってくれない。上からは直ちに5000食準備などいつてくる。終に伍長でしたが、班長はノイローゼ気味で、雨季の近づいた雨の夜、サルヴィン河へ投身自殺しました。(※インパール作戦では糧秣20日分持参で後は現地調達というずさんな補給計画と批判されている)

後に残った私たち班員は5名。兵補はなく、現地人の苦力数人で処理していたのでした。マルタバン河付近は、人馬殺傷弾で一面黒くくすんだ広野になったり。サルヴィン河は流れが速いのですが、日本の大河と速さがちがいます。深くて広い水の流れが強力な圧力をもって河口にぐんぐんおしてくる。見た目には、悠然として波一つ立つ

ていませんが、サイパンにのればその速さがわかります。目標につくのには、舳先を45度は上流に向けなければなりません。しかも馴れた船頭で。大魚ばかり、エラ一枚が大人の手下。草魚の一種ですが、日本酒の斟位の大きさは普通。1メートルのナマズやギギもさらにいます。船から落ちれば、まづ死体も上がらぬ始末。兵站の班長も長い遺書を残して、サルヴィンに消えたのです。見張り、昼夜に付近小隊の助力を得て探しましたが。著者もこの高価なめしは食べてもらっているのです。

私はもつと詳しくマルタバンをお話しする機会もあると思いますが、記録に止めようと以前から考えて怠けています。ジャスマンの花咲く丘もあり、花摘みに上って「街道荒らし」に間一髪やられかけもしました。

(※インパール作戦は破綻し、総崩れの敗走中の本隊に補充兵として荒木氏は合流する1944年9月)

12、13 モールメン集結

〈93頁モーンメン到着〉強いて言えば、日本の神戸市にあたります。市の中央を南北に東山に似て、ゆるやかな坂道をもつ山が峰から峰と続き、寺院(ベア)廻廊(屋根あり)が連なり、仏塔(バコダ)があり、また廻廊とつづいています。京都式に言って山西はサルヴィンに港にした商売地域、官庁街、野戦病医院(元は市の病院)など。山東は住

宅地域、旧伏見市域はゆったり入りましよう。1944(S19)年頃は、峰から峰、西から見て寺院の背後に縄が張っておりコレラ発生地のため立ち入り禁止でした。

1945(S20)年の5月頃には解禁となり、4月中旬から雨季に入っているので毎日灰色の空でしたが、敗残の「弓」「烈」とくに「弓」部隊とききましたが、モールメンの線で抵抗しようとの計画。

193頁の51の糧秣廠云々は私の部隊の管理する貨物廠のひとつで、第2小隊が倉庫番をしていたのです。兵站関係だった私はマルタバンが病氣(ピンピンしていましたが)の将校をつれて、山東の民家にきていました。病人5名(酒も飲めば唄もビルマのチャンチャンマンマンチャンチャンガか……を上手に唄う)の当番兵(下僕)。軍属で飯炊き専門を1人つけてありました。

山西の私の原隊(8224部隊)のいるミッシヨンスクールを兵舎にした校庭の防空壕にも10トン爆弾が何発も落ちて、兵隊の片足が2階の窓際にぶら下がったなど、山東へ風のたより。河岸や商業地域も終にやられ出した。ビルマ人、タイ人、インド人、広東人、など非戦闘員の現地人なのですが、つぶされました。山東は敵の目標の外であつたか、山西をやったあとにするつもりか、一機も入ってこず、ある日青空市場へ夕食の野菜の買い出しに、毎

日のことですが、出かけていますと、敵機です。双胴のロッキードもくるし、B25も来ます。そのときはB25でしたが、たまたま高射砲があたつて、ゆさゆさと巨漢らしくゆさぶりながら落ちるのを見ました。あとできくと、乗員兵全員なぶり殺しにしたそうです。

4、(88頁カレン人)ビルマの少数民族のなかの最大の民族。ポーカレン、スゴーカレン、と大別でき、農を主としたものと、狩りを主としたものと、であるらしい。どちらがどうか知りません。英国は統治するにあたって、ビルマでもコントロールパワーで、カレン族に力を入れて、ビルマ人、それからインド人、広東人を抑えた。カレン人は宗教的にはピューリタンです。私の部隊にも250名のカレン族の兵補がいました。押収した英軍の軍服を着せ日本流に歩兵の訓練。純朴な山の百姓で、私は特に1人のソウチンモンをかわいがりましたし、ほかにも3名、その中の1人とはGEN辞典を中にしてカレンの歌謡をおしえてもらったりしました。万一、進退窮まったとき、ますチンモンの郷里へ落ち延びるソロバンをもっていたのでした。

カレン政策はビルマ統治の最重要課題だと当時のビルマ人の知事からききましたが、現在もそうらしいです。モールメンから南へ行くと、モン族の社会。往昔は商業上手でおおいに栄えた記録があるそうですが、今は米作・漁撈。



〈写真説明〉右より、西村、西口のぞみ、小田切明徳。近所の神社の境内での花見の宴・1996年春

西村清三さんの思い出、若干

①西村氏は1931年8月26日、共産党・ナップ関係の大検挙で五条警察署の留置所第一檻房にぶち込まれました。全協日本一般使用人組合京都支社高島屋分会の活動家だった西村氏は、治安維持法違反で検挙され起訴猶予処分となりました。釈放後は特高の目を逃れるため、住所不定の地下活動にうつり、1933（昭和8）年、京大滝川事件当時に日本共産党京都市委員会を再建した責任者であった西村氏（23歳）は、治安維持法違反の6・20弾圧で再逮捕されました。当時は赤旗配布網の維持にあたっていました。そして、山科刑務所で3年間服役しました。

出所後、「左翼前歴者」として保護観察下におかれました。その後、軍に召集されたものの身分は兵とあつかわれ、輜重兵・炊事兵でした。戦地での軍上層部の腐敗について記述しているのも、特高に逮捕され拷問で叩き込まれた「国体の本義」とか「大東亜共栄圏」とか「日本精神」とか、化けの皮のほころびに「一言あってしかるべき」だったのでしょう。

②戦後、西村氏は1946年に日本共産党に再入党し、また新日本文学会の同人として、同人誌『文化』に「ニャンパ亭」（未見）などを発表しています。初期「燎原」誌（1980年代）には、治安維持法犠牲者の「旧友クラブ」の一員として、戦時中の非合法活動の一端や戦後の文化運動などについてエッセイなどを発表しています。

③伏見区桃山町本多上野の西口克己氏とは目と鼻の先に居住し、親しく近所付き合いをしていました。西村氏の妻ヒロさんと西口のぞみさんは新婦人の同じグループでもありました。1970年代には「新日本婦人の会」の中井あい先生の指導の下、外環状線の伊賀団地前バス停設置の住民運動なども一緒しました。

④1973年から1993年まで、西村清三氏は伏見区選挙管理委員や委員長などを歴任しました。選挙管理委員会の委員長として、選挙の開票作業の結了をつげる拍子木を打つ西村清三氏の凛とした立ち姿は、「治安維持法犠牲者」の万感の思いを込めた力強さを周りのものに感じさせました。

モールメンあたりへ女の出稼ぎも見ました。日本人によく似ている点ビルマ人に劣りますが、モン族そっくりの日本人女性によくあいます。但し、美人ではありません。

この著作はふれていませんが、ご参考までに。サルヴィン河口のデルタにブルジョン島があります。現地人の避難者が多く、戦外にあったかんじ。このほか小島が点在していて、そこにはパゴダがありました。1944（S19）年、私が中隊本部の医務室勤務の頃、毎夜空襲ですが、必ずこの島が小岬になっているあたりから曳光弾が打ち上げられるのです。オレンジ色の玉が曲線を描いて消えてゆくのです。

3発から5発くらいそれぞれ別なところへ消えてゆきます。爆撃です。オレンジの玉の消えたあたりに兵器庫ができたり、糧秣庫が出来たりして、まさしくスパイの存在は明らかです。こと見定めておいて、翌日しらべに行ってみると、ベア（寺）だったと言った例が多い。寺や僧にうっかり手を出すと、ビルマ全人民の抵抗を覚悟しなければならず、うやむやにすぎます。それにしても、曳光弾は美しく、その消えたあたりに上がった照明弾で昼のように明るくなり、倉庫はやられます。毎晩2回くると防空壕へ入って合計2時間、自身番で1時間、ともに寝られません。ウ号作戦の最も被害の少ない

地帯のはなしです。

―倉庫の爆破で思い出すのは、荒木氏の敗戦行のころ、後方は上記のようですが、ラングーンの貨物廠の倉庫が例の曳光弾によって、敵襲を受けます。1倉庫がやられてたのに、報告は2倉庫爆破されたところ。中佐、大佐級の捺印。つまり1倉庫の在庫品の横流しです。遊興費に消えます。こうなると曳光弾を待つようです。ラングーン、モールメンあたりは内地から芸者もかなり来ていたし、朝鮮の娘もいました。中佐と大佐で女の取り合いがあったともきましたし、まず各佐官殿の2号はあった。

貨物廠倉庫の鍵は私の部隊の兵隊がもってました。マルタバンに鉄道部隊の本部があつて、部隊長の2号にたびたび遭いました。農家の庭先で雑談。ビルマの女で日本流にみて、19歳だか、もう少し若いでしょう。金の首飾り、金の指輪、右も左も。金の腕輪、金のペンダント。シュエー（黄金）だらけ。絹かウールだったか、木綿のプリントではないロンギーを腰に巻いて、兵隊は下男とばかり、しゃーしゃーとしてました。ジャスミンの花を綴った花輪で頭髮の束をまいていました。隊長と称する連中の2号の話はまだあります。が、話がそれて失礼しました。

2月例会

今に生きる草野昌彦と仲間たちの活動

田中氏が講演 ぐ遺族・教え子も参加

2月例会は28日午後、東山いきいき市民活動センターで開かれ、田中隆夫氏（治安維持法同盟兵庫県幹事）が「兵庫からせまる今に生きる草野昌彦と仲間たちの活動」と題して、唯物論研究会・「京都人民戦線事件」の草野への関西学院および旧制甲南高校永井智雄からアプローチ、2時間にわたって講演しました。

草野昌彦（1908～1990）は戦前、関西学院で2年先輩の西村欣治郎（共産党員）の影響や、戸坂潤の講演に感銘を受け唯物論研究会に加入、1937年には「学生評論」の編集長

義人として、特高に検挙され、2年間収監されました（京都人民戦線事件）。例会で田中氏は、1926年以降の関学時代、学生以外の須藤五郎や岡本唐貴らも含めて多くの仲間がいてこそ草野の飛躍があったと述べました。

岩井忠熊氏（本会名誉代表）は「草野さんの指導ぬきに『学生評論』は出せなかった。弾圧の時代でもこれだけのことをやったのだと若い学生たちに伝えたい」と発言、退職後、立命館の土曜講座に毎週来られていた、と紹介しました。

例会には、草野昌彦の長男・敏彦さ



人、長女・藤本杏子さんをはじめ、中学校教員時代の同僚、教え子だった人も参加され、それぞれ思い出を語られました。（田中氏の講演要旨は次号で）

●紹介●『文華』38号

部落問題の著名な研究者でもある成澤栄壽さんが「文華」第38号（14年11月、日本民主主義文学会

京都文華支部）に「歴史と文学を考える―島崎藤村『破戒』と谷口善太郎『綿』を通して

―」を執筆。そこでは、成澤さんの恩師、西岡虎之助氏等の歴史と文学についての考察、成澤さんご自身の島崎藤村や『破戒』研究をベースにした「島崎藤村『破戒』の写実性と同時代性」、そして「須井一（谷口善

成澤栄壽「歴史と文学を考える」

藤村『破戒』と谷善『綿』を対比

太郎）『綿』の普遍性と科学性」が収録されている。『綿』については、次号とされているのでおそらく『文華』39号になるのだろうが、補論として

「『綿』に描かれた虚構の社会経済史的背景」の掲載も告知されている。

谷口善太郎を語る会編『谷善と呼ばれた人―労働運動・文学者・政治家として―』の研究を受け、『綿』を愚直なまでに読み込みながら、その基調は、

当時の社会的背景（つまり歴史）と文学作品『綿』（文学作品）の関係性を問う叙述である。『綿』の主人公と実際の谷口善太郎の履歴との比較や、宮

本顕治・蔵原惟人の『綿』への批評、『日本労働組合評議会史』と『綿』との関係にも

目配りされているが、何より科学性検証に耐えうる『綿』に着目した叙述は近現代史の教育に携わる方には是非読んでほしい論考である。

（頒価800円、問い合わせは京都文華支部 075-467-8082迄）

（井手）

『燎原』の合本「電子ブック版」発売中！

CD-ROM版 各巻頒価3000円（送料共）

- 第1巻（創刊号から第50号）
- 第2巻（第51号～第100号）
- 第3巻（第101号～第150号）
- 第4巻（第151号～第200号）

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823（井手方）



1929年3月9日

山宣の遺骨、「花やしき」に帰る



労農党代議士・山本宣治（京都二区選出）が東京・神田の旅館で右翼に暗殺されたのは1929年3月5日。7日に司法解剖の後、遺体は旧労農党の赤旗に包まれて棺に納められ、8日、東京帝大仏教青年会館で告別式。あと茶毗にふされ、同日の夜、妹婿の山中平治の胸に抱かれて東京を後にしました。

9日朝、山宣の遺骨が京都駅に到着。駅前には仮祭壇が設けられ、1500人が待っていました。騎馬警官が追い払おうとしましたが、それを跳ね返し、弔辞が述べられました。

その後、宇治駅でも「涙にむせる大群衆」（毎日新聞）に迎えられ、遺骨は「花やしき」へ。妻千代と母多年らの許で大広間の祭壇に安置されました。通夜は15日まで続き、北川鉄夫と笠松一夫が作詞した「山宣追悼歌」が歌われ、「即興劇」も演じられました。

3月15日には、「山宣・渡政労農葬」が、三条青年会館（現YMC A）で行われましたが、400人の参列者は次々検束され、弔辞すら「中止」させられました。

（写真は家族に迎えられた山宣の遺骨。妻千代と母多年、左端は長男英治）『図説 国民の歴史』より）

解放運動無名戦士 今年の合葬推薦者

国民救援会府本部は解放運動無名戦士合葬追悼会に向け推薦者を募っていましたがこのほど72人の名簿を発表しました。主な方のお名前。（数字は享年）

- | | | | |
|-----------------|----|----------------|----|
| 東 旭（奥丹教組委員長） | 79 | 中道亀一（久美浜町議3期） | 87 |
| 池田 極（平安女学院教職組） | 67 | 早見栄子（大映でレバ、京芸） | 84 |
| 伊藤由實（福天教組・大江町議） | 86 | 廣田善男（共産党府副委員長） | 88 |
| 井上勝己（綾部市議5期） | 86 | 藤井洋一（安井病院事務長） | 83 |
| 大萱 保（美山町職委員長） | 78 | 前田定夫（日吉町議6期） | 85 |
| 桐林 繁（共産党洛南地区委員） | 82 | 増田秀雄（三菱重工、党専従） | 72 |
| 桐山徳三郎（京都市教組役員） | 91 | 松本彦也（府立高教組） | 89 |
| 久古睦治（伊根町小学校長） | 83 | 南 龍男（レバ、ミレー書房） | 83 |
| 小檜山政克（立命大名誉教授） | 88 | 湯浅幸子（日吉町職執行委員） | 79 |
| 佐々木君子（日本新薬でレバ） | 87 | 吉田春代（全通京都婦人部長） | 67 |
| 佐藤昭彦（共産党口丹委員長） | 67 | 若井 勉（立命館教職組） | 71 |
| 新谷 剛（立命大学友会委員長） | 61 | 渡邊政喜（綾部市教組委員長） | 83 |
| 杉本義夫（船井教組書記長） | 84 | | |
| 砂川良昭（共産党府名誉役員） | 87 | | |
| 出井靖男（山科生健会会長） | 77 | | |
| 中谷眞久（京生連会長） | 84 | | |



運動に献身された 人々と出会い直す

秋山花子（大阪府箕面市）

このたびは「燎原」216号をありがとうございました。

わだつみ像を前に致しますと、河原町広小路に揺れた像の苦難の歴史を昨日のように思い出します。末川総長の息女であつた富山さんとの市民活動の日々まで、鮮やかに浮かびます。「初代のようにキャンパスにたてて」という要望を支持する思いです。若い学生に、その歴史

と現在を生き活き伝えることになるだろう、と考えます。

うたごえ運動も、その成り立ちを初めて知りました。労働族の頃は直ぐ前の「炎」で賑わい、以降のフォークダンス活動に会場の小学校をハシゴするなど、おそれるものも失うものもない若さにはあらゆるものが新しい時代のユメにつながりました。『青年歌集』をもう一度手にして、みんなで唱ってみたい、など感傷に浸りたいなどと思ったりします。

「沢柳事件」にあらわれる西田哲学門下の梯明秀氏全集に尽力した友人（今は亡い）との日々。その後、「原爆の図展」抱きしめて琵琶湖」を分けもった刻々は今も価値金です。

関心を持ちながら真相に触れずに過ぎ

京都の民主運動史を語る会5月例会

と き 5月8日（金） 午後2時～4時30分

ところ 福祉広場 北区北野紅梅町85 弥生マンション1階。
市バス北野白梅町下車、西大路通りを北へ二筋目西入る） ☎465-5451

テーマ 3回の京都市長選挙をめぐってー僕の1990年代

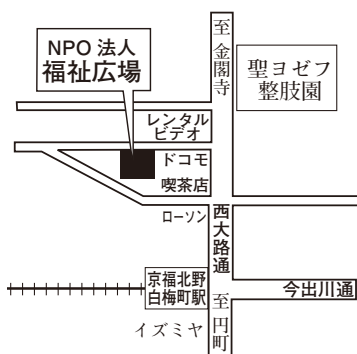
五党軍団を相手に4千票差まで追いつめた96年選挙など、その時、京都は…

語る人 井上吉郎さん

（WEBマガジン「福祉広場」編集長）



1945年京都市に生まれ、紫野高、京大卒。府農業会議、新日本出版社、京都府生協連を経て、1993年、1996年、2000年の京都市長選に立候補、大善戦。映画「エイジアン・ブルー」の制作・普及にも関わった。現在、半身不随の障がい者となったが、ネットを通じて毎日発信、車いすで街頭宣伝活動も行っている。



例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。

てきたことに「光」をあてられると、その縁の末端に生きてきたことの不思議を思います。

「この一枚」は遠い思い出を一举に現在に戻します。私は1954年頃、谷善氏の作品を読んだ記憶があります。その後、宮田栄次郎氏に相談して入党を致しました。往時の谷善氏は思っていた通り優しく暖かい一葉で、当時の労働会館細胞会議に府委員会から出向かれていた梅田勝さんは、精悍な風貌そのままで、往時を彷彿します。

民主運動史を語る、として革命に献身された人々と出会い直しているかけがえない一刻をありがとうございます。

「入会」

高木博志（西京区）・温井徹念（西京区）

情報 スクラップ



731部隊の戦後と医の倫理

京都を中心に開かれる「第29回日本医学学会総会 2015 関西」の並行企画として「医の倫理ー過去・現在・未来」と銘打った講演とシンポジウムが4月12日（日）知恩院和順会館で開かれる。午前9時30分からは青木富貴子氏（ノンフィクション作家）の特別講演「731部隊の戦後と医の倫理」と映像上映、香山リカ氏を司会に討議、午後からは土屋貴志、川田龍平氏によるシンポジウムが予定されている。問い合わせ 府保険医協会（☎212・8877）

こんどは来れたー野見山曉治展

3月22日まで。ギャラリーヒルゲート（寺町三条上ル）12時～19時。無料。☎231-33702

「事務局からのお詫びとお願い」

事務局のミスで2月例会の日程を変更させて頂きました。改めてお詫び申し上げますとともに、以降同様の間違いが起きることがないように、会の運営改善をおこなっていききたいと考えていますので、よろしくお願い致します。

大阪大学大学院文学研究科の准教授の方から「燎原」CD-Rの注文が届きました。新しく「燎原」の申込用紙も作成しました。活用頂き会誌拡大にもご協力下さい。また、「燎原」HP担当者が病氣療養のためHPの更新ができていません。会員の方でHP管理にご協力頂ける方事務局までご連絡下さい。よろしくお願い致します。（井手）

編集後記



▼元最高裁判事の滝井繁男弁護士が2月28日に亡くなった。滝井さんは一年先輩だったが、京都市立北野中学で新聞部府立山城高校では社会科学研究会と一緒に活動した。京大卒業後、大阪で弁護士登録、2002年から4年間は最高裁判事として水俣病関西訴訟などで良心的な判断をされてきた。5年ほど前、あるパーティーで数十年ぶりに再会、以後毎年その会合でお会いしていた。その集まりの日の夕刊に死去が報じられていた。中学・高校時代の「初心」を捨てなかった滝井さん、もつと話を聞いておくべき人だった。ご冥福を祈りたい。

▼5月の例会は井上吉郎さん。この人の人生も波瀾万丈だ。府学連委員長時代のこと、政界に「京都シヨック」といわせた1996年の市長選など、今だから話せる「秘話」を交えて語ってくれるでしょう。会場がいつもと違います。お間違いないように。（湯浅俊彦）